

子育てスキル実演動画は親子遊びの効果を高めるか？

—PCITに基づくホームワーク継続と子の行動・育児ストレスの変化との関連—

○奥野優太¹・井武井祐子²・井門田昌子²

(¹川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科・²川崎医療福祉大学医療福祉学部)

親子相互交流療法(PCIT)とは、親子の相互交流の質を高め、問題の改善を目指す心理療法である(PCIT-Japan, 2017)。PCITではホームワーク(HW)として、養育者に対し自宅にて毎日5分間、CDIスキル(具体的賞賛、繰り返し、行動の説明、真似る、楽しむ)を使って子どもと遊ぶことを求める。HWの継続的な実践を目指したアプリでは、「実演動画」がスキルを遊びに取り入れる一助となったことが示されている(Spigner, 2018)。このことから、動画視聴はスキル理解を深め、HWの効果を高める可能性がある。しかし、動画視聴の有無によるHW完了率とアウトカム変化量との関連は未検討である。本研究では、HW完了率と子どもの問題行動及び育児ストレスの変化量との関連を、実演動画視聴の有無から検討することを目的とする。

方法

対象者: 児童発達支援センター等を利用する養育者(平均年齢=37.6歳, $SD=7.59$)とその子ども(平均年齢=4.3歳, $SD=1.49$)の10組であった。5組はHWのみ(非視聴群)、5組は動画視聴とHW(視聴群)を実施した。**動画内容:** 第一著者が、CDIスキルのうち3種類の各スキル(具体的賞賛、繰り返し、行動の説明)を使い、5歳男児と4種類の各玩具で遊ぶ約20秒の動画12本を作成した。**手続き:** PCITプロトコル2011のCDI Teachを参考に、HWやスキルについて説明し、ロールプレイを行った。その後約7日間、可能な限りHWの実施を求めた。視聴群には期間中、動画視聴も依頼した。期間終了後、質問紙への回答を求めた。**質問紙:** 日本語版アイバーク子どもの行動評価尺度(ECBI; Eyberg et al., 2014 加茂訳2014)、PSI育児ストレスインデックスショートフォーム日本語版(PSI-SF)3因子モデル(Hatakeyama et al., 2022)を使用した。PSI-SFは、母親以外も対象となる可能性を考慮し、一部項目の表現を変更した。**倫理的配慮:** 川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た(承認番号24-096)。

結果

各群における変数間のSpearmanの相関係数を求めた。その結果、非視聴群において、HW完了率と各変数には有意な相関は見られなかった

(Table 1)。一方、視聴群において、HW完了率とECBI強度スコアとの間に有意傾向を示す強い負の相関($\rho=-.87$, $p<.10$)が見られた(Table 2)。

Table 1
非視聴群における変数間の相関係数

変数・下位尺度	①	②	③	④	⑤	⑥
HW完了率	①	—				
ECBI						
強度スコア	②	.000	—			
問題スコア	③	-.648	-.671	—		
PSI-SF総得点	④	-.108	.975**	-.516	—	
むずかしい子ども	⑤	.000	1.000	-.671	.975**	—
親の苦悩	⑥	.316	.600	-.447	.667	.600
配偶者	⑦	-.583	.474	-.177	.406	.474

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

Table 2
視聴群における変数間の相関係数

変数・下位尺度	①	②	③	④	⑤	⑥
HW完了率	①	—				
ECBI						
強度スコア	②	-.872†	—			
問題スコア	③	-.400	.462	—		
PSI-SF総得点	④	-.200	.359	-.500	—	
むずかしい子ども	⑤	-.103	.289	-.616	.975**	—
親の苦悩	⑥	.051	.289	-.154	.821†	.763
配偶者	⑦	-.258	.000	-.775	.775	.816†

** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

考察

視聴群では、HW完了率の高さは問題行動の頻度評価の減少と関連する傾向が見られ、群によって関連のあり方に違いが示された。Davis et al. (2018)は、養育者が具体的賞賛に関する動画を視聴することで、その知識と使用が増加したと報告している。このことから、視聴群では実演動画によりスキル知識が深まり、非視聴群よりも適切なスキル使用につながった可能性が考えられる。このようなスキルの質の変化が、問題行動の改善と関連する傾向を示した可能性が推察される。しかし、育児ストレスとは関連が見られなかった。ECBI強度スコアは子どもの行動頻度を、PSI-SFは養育者の主観的な認知や感情を尋ねる尺度である。このことから、HWによって子どもの行動には一定の変化が生じたものの、養育者の認知や感情が変化するには至らなかったと考えられる。今後は、子どもの行動や養育者の認知、感情に変化をもたらすHWの期間を検討する必要がある。

主な引用文献

奥野優太・門田昌子・武井祐子(2025). 親子相互交流療法(PCIT)のホームワークに関する課題と展望 川崎医療福祉学会誌, 35(1), 23-36.